

〈公開講座〉

神奈川の歴史を学ぶ

公開講座「神奈川の歴史を学ぶ」は一九八七年八月二日(金)八月二三日(日)の三日間にわたり、法政二高会議室に於て行われた。同講座は本会会員が参加した『史料で語る神奈川の歴史六〇話』(三省堂、一九八七年六月刊)の出版を記念すると同時に、本会の夏の活動の一環として計画され、法政二高育友会教育研究所の協賛を得た。

三日間の参加者は二五名であり、他に講師四名を加えると三〇名近い人々が参加した。参加者は、新聞広告(読売・東京の各紙)による人、ピラを見て来た人、歴教協関係者、本会会員の友人などが多かった。

三日間の講演は、古代・中世・近世・近代各時代の『六〇話』に執筆された方々にお願ひし、各講演とも講師と参加者の間に盛んな討論が行われた。

当日の参加者の声については、アンケート集約において行われる予定なので、ここでは企画サイドからの反省点をあげておきたい。暑い日々の続いたなか、結果的には三〇名という多くの方々が増されたが、やはり三日連続の講座は少々長すぎたようである。一日二人の講演で三日間という運営は、内容的に盛りだくさんになってしまった。やはり一日一人の講演・討論、または土曜日ないしは日曜日の一日で三週間連続という運営が、参加者には好ましかっただろう。また、京浜歴科研の行事恒例の参加者による自己紹介が今回行われなかったが参加者の交流という面からも、次回の講座の時には検討されるべきであろう。他にも、ピラに講師紹介の文章を入れてほしかったとの声もあった。

過去、本会の活動スタイルとしては、毎月の例会・勉強会、月報・年報の発行、年一回の合宿という会員のみの活動の他に、会の成果

を内外に広める意味として、春秋のフィールドワークや総会でのシンポジウムなどが行われてきた。従来のこれらの活動に加えて、今回初めて会外の講師の方々を迎えて講演を開くという形式が導入されたわけである。講師の方々を迎えるということは、当然、会のことまでの成果を発表することに重点を置いた従来の会活動とは性格が異なる。会員は、運営にあたりと同時に、できれば講師の方々の業績を事前に吸収して、その場の討論を深めていく役割を担うべきであろう。すなわち、講師の業績に学びながら自らの研究を深めるという姿勢が必要だということである。

今回、明らかになった実際の運営上の問題点と同時に、講師を迎えての活動の意義についてもさらに深められるべきであろう。

(文責・大湖賢一)

【講演要旨】

原始神奈川を掘る

岡 本 勇

神奈川県内には多くの遺跡があるが、本講義では主に港北区にある大塚遺跡を例に「縄文時代と弥生時代のムラ」について、県内の主要な発掘資料と最新のデータを加えて講演していただいた。

大塚遺跡は昭和四七年から発掘された弥生時代中期の遺跡だが、港北ニュータウンの開発計画で遺跡の上を中央幹線道路が建設されることになり、やむなく弥生時代の下を発掘調査することになった。弥生時代の環濠集落址の下からは堅穴住居、掘立柱建物址が確認された。個々の住居址は完全、或は不完全な長方形をしており、それらは中央に広場を持つ典型的集落(址)をなしている。広場の一部には墓地または貯蔵穴がある。これらは関東の他に中部・東北にも存在する。講義につづいてスライドで、大塚遺跡やそれ以外の例を見た。特に驚いたのは八王子の長径が二〇mもある亀甲型をした住居址である。中期において日本海側では巨大な建物址が出るそうであ

る。諸説が出ているようであるが、一人が入ってしまいう柱穴を持つ建物址は、果たして何に利用されたのか興味を湧くところである。

続いて、弥生時代のムラについて、スライドを利用しながら講義がなされた。弥生時代の環濠集落は周囲に掘をめぐらした環濠集落である。個々の住居は圧縮した小判型で、柱穴・炬址の他に出入口用のハシゴ穴を有する。また、重なり合った住居址も多く出ており、何度も建てなおされたのが分かる。住居の耐用年数は十年程だといふ。周囲の環濠は外部から集落を守るために掘られたものと考えられ、当時、戦闘があった社会を語っているようだ。内部は通路のよいうなもので三分割されており、分けられた区域毎に非常に大きな住居址を有している。このように大塚遺跡は、小集落が集まって成る拠点集落であると考えられ、付近の集落と共に地域集団を構成していたのではないかと推察されている。

集落の復原という点、まだ集落を完掘した例は少ない。大塚遺跡の場合は墓域も加わり、弥生時代の集落の実態を把握できる資料として非常に優れている点を強く感じた。また、人口増加・都市集中化により、神奈川県内にも遺跡破壊やそれに伴う小競り合いが見られる。本講演では大塚遺跡の集落としての役割り、また当時の社会の他に、文化財保護と開発という相反するテーマについても考えるところがあった。

(文責・柴田洋子)

富士山噴火 — 宝永噴火をめぐる地域と幕政 —

川 島 敏 郎

富士山は宝永の噴火の前にも万葉集にも出ている様に昔から何回となく噴火をしている。八〇二年や八六四年の噴火はいずれも大規模なもので、八六四年の噴火の後には熔岩台地が形成され、現在は有名な「青木ヶ原樹海」となっている。

さて一七〇七年の宝永の大噴火であるが、資料にある様にその年の十月に突如として火を噴いた。そして多くの砂降りをもたらした。

神奈川県にどの位の砂降りがあったのか史料によると、たとえば横浜で七、八寸（21〜24 cm）、多い所では二尺三寸（約70 cm）にもなっている。冬に降る雪と比較して、その多さがわかる。

砂降りがやむと百姓らによって砂除け作業が開始されたが、困難をきわめた。特に田地の復旧は大変であり、砂置き場にされるものもあった。

この様な状況で、幕府は御救金を相模・武蔵・駿河の砂降り三ヶ国の村々に藩・旗本知行所を通じて配分したが、石高一〇〇石につき三両という額からわかる様に、被害の甚大さからみるとわずかなものでしかなかった。

特に被害が甚大であった小田原藩においては埋没地の天領への編入とそれ相当の代替地が与えられることになったが、砂除けが百姓の努力によって完了して旧地が小田原藩に戻ったのは噴火後四〇年もたつてからであった。

また小田原藩では砂降りの善後策をめぐって藩と百姓との間に争論が展開した。藩が砂除けによる田畑再開発は百姓の自力でやれという態度であったからである。農民たちは藩・幕府に援助を要求、四万五千人もの農民が集まったという。

砂除けをするといってもそれはどこかにまとめなくてはならないしたが、あちこちに砂が集められ、富士塚とかいった名がつけられる様になった。

（文責・青山永久）

武士の世 — 中世の神奈川 —

池 永 二 郎

中世武士団の研究は、史料が断片的でわかりにくいという制約があり、まだまだこれからという現状認識の下、その地域に住んでいた人の眼で歴史をみるのが大事であるという視点に立って、現綾瀬市から藤沢市北部にかけて存在した渋谷荘（大庭御厨の北側）を拠点に鎌倉初期活躍がみられた渋谷氏を中心としてのお話であった。

東国荘園については明確にすることは難しく、渋谷荘も本所が円満院とはいかがいつ頃からかは不明という。渋谷氏の出自は、平良文流の秩父党で河崎基家一重家一渋谷重国一高重の系譜をたどることが出来る。基家は武蔵国留守所総検校職として国府（現府中）に住んだ兄、秩父重綱の援助で武蔵南部への進出を果たしたものと思われる。重家については全く不明で、重国が保元・平治の乱に登場して来ないことから、源頼朝挙兵前二十年程の間に、大庭景親が相模国の指揮権を持って成長して来たのと時を同じくして台頭したものと考えられる。

重国は一八〇年の頼朝挙兵に際しては、平家方景親軍に属して石橋山で戦っている。挙兵前、彼の許に寄留していた佐々木秀義を招き、その子四兄弟が頼朝に加担せぬ様、警告を発しているのだが、事実上、参加を容認した形になっているのは、今後の身の振り方を天秤にかけている様で面白い。重国もいつの頃からか頼朝に従っている。

後、一一八四年義仲追討に際して義経に従ったり、翌年には範頼軍に属し九州に渡る際、土肥実平と先陣争いをするなどの活躍を見せるが、四男が頼朝の推挙前に朝廷から受官し不興を買うなどのこともあった。それでも、重国や子等の功績を否定できず、有力御家人に数えられることとなり一一九五年、（永福寺？）堂供養のため東大寺僧を導師として招く折の伝馬役には、三浦義澄らと同じく五疋が割当てられている。

しかし、頼朝の死後、北条氏の台頭と共に頼朝以来の御家人が没落していく中、頼朝の寵愛を受けた次男高重の妻が横山時重の娘であり、同時に時重が和田義盛の舅という関係もあり、和田合戦に連座することとなった。渋谷荘は没収され、女房因幡局に与えられたが、一部の相続は認められ細々に命脈を保つことになる。

以上、渋谷氏を中心に講演の筋を追ってきたが、この他に鎌倉期の政治・社会体制に関わる本質的な問題にも言及されたことを付言しておく。

（文責・伊東富昭）

四三万発の焼夷弾 — 横浜大空襲 —

石 井 喬

石井先生のお話は今年一九八七年が何から五十年経ったのかという質問から始まった。一九三七年が日中戦争開始（盧溝橋事件）の年であることはすぐに思い出されることであるが、同じ年ドイツによるゲルニカ爆撃が行なわれたことについてはきちんと答えられる人はほとんどいなかった。戦争を知らない世代の増加に対し、戦争の真の姿を語り継ぐことの重要さもさることながら、日本が戦争をしたのはアメリカとだけではないこと、中国や東南アジアの国々とも闘ったこと、被害の面だけではなく加害の面にも目をむけることの重要さを指摘され、あわせて、最初の質問にもある様に世界的視野で戦争を考えることを強調された。

今回のテーマである横浜大空襲（一九四五・五・二九）の実態については「空襲を記録する会」を通じて明らかになってきたものであることを紹介され、一九四二・四・一八県下初の空襲から四五・八・一五小田原の空襲まで県下の主な空襲の状況について話されたが、横浜大空襲については、次の様ないくつかの特徴を指摘された。東京が夜間五時間の爆撃であったのに対し、横浜は午前中の約一時間の間に東京を約一、〇〇〇トン上まわる焼夷弾が投下されたこと。原爆投下第三目標にされていた横浜へは、五月八日にドイツが降伏したために、ヨーロッパ・沖縄配備のB29が集中し、多大な被害がもたらされたこと。工場爆撃よりも焼夷弾による住工混合地域を爆撃する方が効果絶大であるとの判断をした米軍の戦術転換により東京をはじめとして民間の被害が大きかったが、横浜も例外ではなく、しかも被災者は女性六三%、男性三七%、男性といっても多くは年寄と子供であったこと。警察発表の死者三、六五〇人は過小であり、実際は八、〇〇〇人から一万人位であったこと。また横浜だけではなく全国的な実態として、防空壕が民間まかせで、イギリス・ドイツの様に公共施設として造られたことがないこと、など。

また空襲そのものの状況については、目には見えない音や臭い、風熱、のどの痛みなどあらゆる観点から捉えなければならぬことを強調された。

戦争という状況下で生命の危険にさらされた時、被害者が容易に加害者になりうる例として、朝鮮人李さんの体験談、『ムッチャンの詩』を紹介した先生は、二度とこうしたことのない様に、身近な空襲遺跡を歩くことや平和資料館の設立などをうたったえて講演を終了された。

（文責・奥田和美）

東国唯一の貿易港 — 鎖国以前の浦賀 —

後 藤 正 吉

浦賀といえば、ビッドル・ペリーの来航地として有名だが、開国以前に東国における唯一の国際的貿易港であったことは意外に知られていない。

中世以来、輸送都市や三浦水軍の港として開かれていた浦賀を、国際港に変貌させたのは徳川家康であった。当時、ポルトガルは豊臣秀吉やキリシタン大名と西国中心に貿易を行っており、一方、イスペインも日本との交易の道を探っていた。家康はフィリピン・メキシコとの貿易計画をもち、フランシスコ会修道士ジェロニモ・デ・ジェスにイスペイン船の浦賀来航の便宜を要望した。イスペインのフィリピン政庁は、フィリピン・メキシコ間の船の寄港地の確保とイスペイン系の托鉢修道士の宣教活動の保護を受けることの二点を目的に、浦賀への商船派遣に踏みきることになった。

慶長一三年に、フィリピンから浦賀へ直接送ったイスペイン商船が入港した。家康はイスペイン商船との取り引きのため堺の商人西類子（宗真）を招き貿易振興のため手を打っている。この時、浦賀には修道院などもつくられていたようである。

家康はフィリピン航路に引き続き、メキシコ航路の開設の要望をもっていた。その願いは上総で遭難したドン・ロドリゴ・デ・ピペ

口等一行を幕府の洋式帆船（一〇〇トン）によって送り届けるという形によって実現した（慶長十五年）。しかし、この時メキシコに渡った田中勝介の貿易交渉は実を結ばず、再度の渡航計画も浦賀沖での難破により失敗に終わった。

その後、慶長十八年に伊達政宗の遣欧使節がメキシコに向かった。この船には幕臣向井忠勝の家臣十名ほどが乗船し、自分の商品をメキシコで販売する意図をもっていったようである。元和二年、家康が死去し、同年八月には長崎・平戸以外にヨーロッパ船の寄港を禁じるようになり、貿易港としての浦賀港は終わりを告げる。同年、支倉六右衛門らのローマ使節を迎えに行く伊達政宗の船が、浦賀から出帆した最後の貿易船であった。

（文責・大湖賢一）

自由民権期の神奈川

内田修道

神奈川の民権運動の特質を考える場合、従来の研究史の中に欠けていた初期県政と豪農との関係という問題を検討していかなければならぬ。

神奈川県は成立当初より外国人居留地をもつ開港場をひかえ、そのため初期県政の第一の主眼は外交問題であり、県令には欧米思想に明るい開明的な県令が赴任してきた。彼らは、県内の騒擾を最小限にとどめるために出来るだけ民意を汲みあげ、それにそった県政を行うように努めた。この姿勢を「官民両権主義」とよび、その典型が真土事件の減刑嘆願運動時の野村靖県令の態度にあらわれていた。

一方、この「官民両権主義」は維新前後の荒廃した農村の現実と直面した豪農層に支えられていた。彼らの多くは農村の秩序回復の方法として国家を支える基盤として自らを位置づけることによって危機をのり越えようとした。その一例が町田の「郷学趣意書」にみられる。この「郷学趣意書」では儒教思想を郷学校の中心にすえ、

自らの村を「王化」を軸に位置づけ、国家を支えるものとして認識しているのがあった。

この「官民両権主義」は、明治一四年の政変により中央政府の専制政府への道が明らかにになり、県側から崩れていった。一方、豪農層も困民党事件において、仲裁者としての自由黨員の多くが金貸会社役員であるという現実と直面して、自らの階級的立場を自覚していった。それに加えて甲申事変の発生は彼らの危機意識をさらに激しくし、国家における自らの地位を「上流二位スル者」、負債農民を「下流ノ人民」と区別するという豪農の立場が明らかにになっていったのである。

（文責・大湖賢一）

アンケート報告

京浜歴史科学研究会では本企画（「公開講座」）を行うにあたり参加いただいた方々に無記名によるアンケートをお願いした。本稿はその報告である。

アンケートの第一項は、

今回の企画をどのような方法で知りましたか

- A、京浜歴史科研のピラ B、新聞広告（紙名）
C、人にすすめられた D、その他（ ）

というもので、今後こういった企画の宣伝を考える際役立つるためのものである。その結果は、三日間のべ十九回答のうち、

- A、二 B、一 C、八 D、八

という内訳であった。D、その他の八回答は、いままで本研究会が行ったフィールドワーク等に参加していただき本研究会より御連絡し上げた方、及び石井先生を通じて「かねさわ歴史の会」の方の参加によるもので、Cの八回答と併せ、参加者のほとんどが本会会員のコネクションによるものであったことが解かる。ある方（五八歳、男性）の感想として「参加者が少なくて驚いた。」というものがあつたが、今回のこのアンケート結果を今後の宣伝活動に役立てて

行きたい。

つづいて各講演の感想を書いていただいた。本稿では皆さんの感想を各講演毎にまとめてみたいと思う。

八月二日『原始神奈川を掘る』岡本勇氏講演について

。「私の住む地域の近くに弥生時代中期の遺跡があることを教えられたことです。すぐにでも現地巡りをしてみようと思っただけです。」(六四歳、男性)

。「縄文時代と弥生時代の住居跡について、その配置が古墳発生のクニというものに発展していくこと。又住居の建て替えの仕方などスライドを使ってみせていただきたいへんわかりやすいお話でした。」(二一歳、女性)

このように岡本氏の講演は、氏自身が港北ニュータウン等、この地域を實際に握っておられ、その体験から広くお話をされたことで「地域から国家への展開過程がつかめた。」(四四歳、男性)といった感想も出されている。ただ当時の人々の暮らし(当時の婚姻形態など)についても言及して欲しかったという意見も見られた。(六二歳、男性)(三五歳、女性)

八月二日『富士山噴火』川島敏郎氏講演について

。「天災のすごさをあらためて知ると同時に、その災害を克服してきた民衆の努力のすごさを感じた。」(四四歳、男性)

。「話として聞いてはいいたが、神奈川近世災害史年表による災害を知り、私達の先祖の苦勞がしのばれる。現在の生活の豊かさを改めて見直された。」(六四歳、男性)

川島先生の講演はこのように富士山噴火を災害としてとらえてお話をされたものであったが、同時にこのことが信仰、産業面にも大きな影響を与えたことが印象に残ったというような感想もあった。

(二一歳、女性)

八月二日『武士の世』池永二郎氏講演について

。「実証的、体系的な研究にもとずいたお話、たいへん勉強になりました。」(五四歳、男性、高校教師)

。「武士の社会構造の一端は理解できた。」(五八歳、男性)

。「私は小山氏について少し勉強したのですが、神奈川の武士団については良く解っていませんでしたので、池永先生の講演を拝聴させて頂き、勉強になりました。只、私が勉強不足故にこまかい過程がわからなかったところもありました。」(二六歳、女性、非常勤講師)

このように池永先生の講演は「研究」というものを感じさせてくれるお話で少しむずかしかったが面白い、というものだったようです。また先生は参考書の紹介をされましたが、そのことについても

。「中世の武士に関する本を若干読んでいたので面白く聞くことが出来た。又、参考となる書籍の紹介もあり、またこれを読む楽しみが生まれました。」(六四歳、男性)という様な感想がだされている。

八月二日『四三万発の焼夷弾』石井喬氏講演について

この講演については實際に戦争、あるいは空襲を経験された方とされていない方、また空襲を経験された方のなかでも記憶に生々しい方とそうでない方との間で異なった様々な感想が出されました。まず戦争体験のある方の感想から

。「戦争体験を(被害の面も加害の面も)正しく継承しなければならぬと強く感ずる。」「戦争について自分の意見を語らなければいけないことを感じる。」(六〇歳、女性、主婦)

。「体験者として感銘深かった。」(五八歳、男性、会社員)。「私も空襲の下を逃げ回った年令ですが、平和の中で体験を人に伝える事はむずかしいですね。私としては自分の子供に何かがあったときに正しい判断と間違いでない

行動をとる人間になってももらいたいと努力しております。」

(五〇歳、女性、主婦)

。「同年令の石井先生がここまでくわしく調べていらっしゃることに感心し、私も東京で大空襲を経験しておりますが、ほとんど記憶にありません。今後このことを子供達にも是非伝えていきたいと考えました。」

(四八歳、女性、高校職員)

つぎに戦争を経験されていない方の感想として、

。「私は戦争を知りませんが、空襲とはどういうものなのか具体的にわかりました。さらに戦争を通じて人間性がゆがめられる人間のこわさも感じました。日本の民衆の中にも加害の面があったことはびっくりしました。戦争って本当にイヤですね。これを通じて何をなすべきかを感しました。」

(二六歳、女性、非常勤講師)

。「横浜大空襲についての話は今十年ぐらい前に中学の先生から聞いたことがあります。今回講演を聞き、自分がそのときのお話をほとんど覚えていないことに気づきました。今回の講演は横浜の空襲に至るまでの事、空襲のことを多方面からとらえてありわかりやすい講演でした。又、講演を聞いていらっしゃる方からの様々なお話は興味深く聞かせてもらいました。」

(二二歳、女性、学生)

八月二三日『東国唯一の貿易港』後藤正吉氏講演について

。「三浦半島について中世の歴史の勉強中であった。この講座を聞いて近世の浦賀について新たな見方が出来て来たように思う。これからの勉強にファイトが湧いて来ました。」

(六四歳、男性)

。「浦賀という港を、私達が知っている事例、或は知らなかった事例など多くの事実から講演していただき、たく

さんのことを知りました。知らなかった事ばかりでした。」

(二二歳、女性、学生)

。「歴史の教科書にはペリーがやってきて開港をせまったとき以外には出てこない浦賀が、実は徳川家による東国の貿易港として一時開かれていたことなど初めて聞く話もありました。」

(二二歳、女性、学生)

このように後藤先生のお話は『神奈川県史』にもない浦賀についてのもので、筆者もまた自分の無知を思い知らされたような気がしました。

八月二三日『自由民権期の神奈川』内田修道氏講演について

。「私の不勉強で概略を初めて教えられたようです。明日からの「テーマ」として今後勉強してみたいと思う。」

(六四歳、男性)

。「神奈川の自由民権運動の特質がわかりやすくコンパクトにまとめられていたと思います。」(三五歳、女性、主婦)

。「勉強の必要があります。」(六〇歳、女性、主婦)

。「自由民権の事から、地方史の在り方まで多くの内容についての講演で、新たに考えることの多いものでした。」

歴史の勉強の意義について悩んでいる学生にとっては、今日の講演は非常に有難かったです。」

(二二歳、女性、学生)

内田先生の講演は参加者の感想を見る限り、少し難しかったようです。しかし「勉強してみたい」と感じられた方が多かったことは、先生の話が本研究会の活動を通して史料を読み込み、フィールドワークまで行った上のものであるということとともに、ただ「明治の話」というのではなく、例えば「神奈川県」の性格といった、地域を介して現在までの連続性とでもいべきものを参加者に感じさせたためだと思う。

アンケートの第四項は

今回の企画（公開講座）についてどう思われますか

というもので、いわば総評とでもいうべきものを書いていただいた。

。「三日間通じて神奈川県に住んでいながら県内の歴史で知らないことがたくさん在り、あらためて神奈川県について考える機会となりました。」（二一歳、女性、学生）

。「私共は殆ど普段こういう機会に恵まれず、たいへん貴重な勉強をさせていただき、この夏休みの大きな収穫だと思っております。」（四八歳、女性、高校職員）

。「有意義な数時間を過ごさせていただき、学んだ前と後では自分の意識が変わったと思います。」

（五〇歳、女性、主婦）

。「今日は人間の生き方にまでふれて何か自分の実になったような気がしました。若い者より人生の先輩が積極的に参加されていた姿に私は刺激を受けました。」

（二五歳、女性、非常勤講師）

。「三日連続で集中的に講座に参加できてうれしいと思います。内容は、事実や推論や所感などをまじえてお話を進められていらっしゃるのですが、どうして講師の先生方がそうお考えになるのか、どうしてそういう結論を導かれたのか、といった考えの軌跡のようなことのお話をもっと聞きたかったと思います。」（男性）

。「テキストの資料にそったお話の方がよかったです。はいかと思えます。（別個の配布資料が多すぎて消化不良になりました。）」（三五歳、女性、主婦）

アンケートの最後は、

今後どのような企画や活動を希望されますか

というものであった。これに対する御意見はほとんどただけなかったが、「一般の人がもっと自由に参加できる企画を」（一九歳、

男性）や、「学校教育者、市史編纂等関係者、在野の郷土史研究者など地域に密着した研究交流の活動を」（五八歳、男性、会社員）とか「今回のような公開講座の継続と、その後机をコの字型にしたような討論会もやっていいのでは」（二六歳、女性、非常勤講師）といった貴重な御意見が寄せられた。

今回のこのアンケートの御意見は今後の本会の活動、及び企画に役立てて行きたいと思えます。御協力ありがとうございました。

（文責・植山 淳）

